随筆 I

旅・人

随筆 I

旅・人

福原麟太郎著作集 5

福原麟太郎著作集 5
随筆I　旅・人
昭和四十三年十月
昭和四十三年十月
定価

発行者　小酒井益蔵
印刷者　小酒井益三郎
印刷所　研究社印刷株式会社
発行所　研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(三六九)四五二一(代表)
振替東京　八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara

目次

メリ・イングランド

船……三
A Sentimental Journey……七
パリ……一三
メリ・イングランド……一九
ロンドンに住む……二四
続　メリ・イングランド……二八
続々　メリ・イングランド……三三
モルナール……三九
ベネディクト・ビスコップ……四一

ロンドンの霧……四七
クリスマス風景……五二

春興倫敦子

春興倫敦子……五七
主知主義的会食……七四
Express Dairy……八〇
ゴランツ先生……八五
イーリー本寺……九六
The National Gallery……一〇一
ロンドンの古本屋……一〇六
ナポリ出港……一一〇
ギリシャ語……一一六
アメリカまで帰る……一三〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

惜春賦……一三七

新しい家

ギリシャを憶う……一四五
ミノアン文化……一五三
河……一五七
リヨン……一六一
ハイデルベルヒ……一六五
白蘭記……一七〇
スペインの旅……一七五
シュロップシャ・ラッド……一八二
岡倉由三郎先生……一八八
I 追憶……一八八
II 人間に遊ぶこと……一九〇

Ⅲ スポット・ライト……一九八
Ⅳ 教　室……二〇二
Ⅴ 研究室茶話……二〇五
石川先生のこと……二〇九
高垣松雄氏……二一三
Ⅰ 追　想……二一三
Ⅱ 弔　詞……二一七
土田杏村……二二〇
初夏二題……二二二
伊　豆……二二五
宇　治……二二一
京　都……二二六

生活の中にある教養

わが人物ベスト5……二四三
往昔好日……二四六
エドマンド・ブランデン……二五〇
北原白秋……二六〇
嘉納治五郎先生……二六三
芳賀先生……二七〇
丘浅次郎先生……二七二
平田禿木氏……二七五
岡倉先生と禿木氏と……二八〇
若き西田幾多郎氏……二八五
久保田さん……二九〇
芝居話……二九四

古い友達……二九八

愚者の知恵

同僚としての藻風……三〇三
喜安先生……三〇八
加藤武雄氏の追憶……三一三
上田辰之助博士を憶う……三一八

本棚の前の椅子

岡倉天心……三二五
無事の人……三三一
小泉信三先生……三四四
英語教師の挑戦……三五〇

変奏曲
テムズを下って……三六七
変奏曲……三八六
人間天国
小野アンナさん……三九五
マカルパイン氏……三九七
茶色の洋傘の教師たち……三九九
諸国の旅
歳末のロンドン……四一五
イギリスの春……四一九
フランスの思い出……四二八

イタリアの旅……四三四
英蘇遊記……四四〇
英京七日……四四九
昔の町にて……四五二
マンチェスターにて……四五四

書斎の無い家

花のパリ……四五九
イタリア紀行……四六一
ブランデン来日……四六四
街……四六六
わが今昔……四六九
しゃあんち、しゃあんち……四七三
詩人ホヂソンの死に際して……四七七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

紳士・吉田健一……四八一
金栗足袋……四八五
ガン・ブーム……四八七

日本の空の下

森田たま女史……四九一
小酒井五一郎氏を弔う……四九三
随筆の術……四九六
サー・ウィンストン・チャーチル……四九八
T・S・エリオット追憶……五〇一
早春譜……五〇八
日本の秋の空の下……五一一

折り折りの人

七代目幸四郎……五一七
小山内薫……五二一
戸川秋骨……五二五
菊池　寛……五二九
安倍能成……五三三
楊　草仙……五三七
竹友藻風……五四一
上田辰之助……五四五
ヘンリー・バーゲン……五四九
杉村楚人冠……五五三
あとがき……五五七
掲載紙誌一覧表……五七〇

メリ・イングランド

『メリ・イングランド』　文教閣　昭和九年二月発行
B6判　二一六頁
吾妻書房　昭和三十年七月発行（増補）
B6判　二六八頁

船

ハムブルグの港には、数知れぬ多くの岸壁の凹凸の中に数知れぬ諸国の船が泊っていて、HAPAG社などの巨船の幾つももやっている片隅に日の丸の旗をあげた小さな日本の荷船が二つ碇泊していた。

ニューヨークの町を見物のついでに、エムパイア・ビルディングの百二階の天辺へ上ったとき、港の方をながめ下すと、これもまた歯車の目のように見える岸壁に四本煙突の巨船が、まるで、はみ出すように、その一つの歯の目の中へ大きくはさまっていた。檣頭に飜っているユニオン・ヂャックを見ないでもその船が昨日私の乗って来たモーリテニアであることは一目で知れた。

こうして諸国の旅人を運ぶために、広い海の上を縦横に行きかい往き交いしている船というものについて、私はもうその頃十分ロマンティックになっていた。そして時には日本の港へ来る外国船のことなども考えてみた。

遠いフランスのマルセイユの港からメサジアリ・マリティム社の船はいきな三色旗を掲げて、フ

ランス語とプロヴァンスの葡萄酒とを乗せて、明石の島影から和田の岬を目がけて入って来るであろう。星条の旗をはためかせたドラー・ライン社の船は、ペリーの傲慢をいまもその舳にぶら下げ、浦賀の浜を横に見つつその速力をゆるめるであろう。それに乗ったアメリカ人達は、ヨコハマのホテルで飲める洋酒の事を考えながら、小さな日本の銀貨を数えているであろう。

私がヨーロッパへ行く時に乗った船は、日本郵船会社の香取丸で二十年も前には当時随一のハイカラな新造船であったろうが、今はもう古びた荷船のように感じられた。姿も美しくはなかった。しかし私はこの船を愛した。門司の港へ着いたとき、はるばる佐賀から見送りに来てくれた友と、その夜は山ぞいの静かな旅館に床を並べてねながら、時にはその香取丸Bデック37号室に横たわっている私の白いベッドの事を思っていた。揚子江を溯って上海の港につくと、まだ明けきらない河の上をどこからともなくたくさんのジャンクが私の船を目がけて群がり寄って来た。香港の港に上陸して、山腹の旗亭に休息した時には、前庭へ出て、はるかの彼方、港の中程に泊っている香取丸を見つけることを忘れなかった。

それからシンガポールにつきインド洋の諸港を経て紅海に入り、私どもは一日船をすてて陸路カイロからポートセッドに向う夜汽車に乗って走っていた。ひょいと見ると、鉄道線路と並行になったスエズ運河を、まるでお祭のように燈火を点じたわが船が、しずしずと探照燈を閃かせながら進

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com